



和歌初重傳秘抄

~ 4
8170



和歌初車傳之事

<2012-77>



和歌初車傳之事



一 初車而示を者の傳と云らざる哉のとははと此傳
 ありてをを神を此傳といへば宗家易にハとあり
 かに此を由一初を古襲したる人のま位とある
 哉師眼子見とて傳授を伝たり堂上か
 するもとけ傳を得たまふより宗道家と稱
 候も也を大切の傳なり

一 傳書書書上より大高檀紙を折て去るる免
 たりふを神神るとはくは宗家なりなり

一 傳書の裁りありはくは宗家の心を執る心好
 てはくは神なりと其通工おけぬを今傳り
 上よりよむなり大なるそハとありかたはくは

かみひしつれをいふてさびしむるもはまきあに管をさか
のこりあつてハ作者の心をなしみしていふ法中
あつてはあつたりはしつたつて通さずおぼえのよれ
あつてをさきあつてふあれり也

一 けいけい傳授志しうと地下まてみこりよよさ
可きあつておぼえをさきあつて私りら堂上の語を
終へはまて慎^れ慎^れ第一なましたとて杖あまは
くもは傳をさきあつて古の源文の意味を知ら
はる也勿論不傳の人いりさすのけは甚深なる
さきあつてをさきあつてはるる也

一 傳書此かにいやうにするを後しをさきあつて
さきあつてをさきあつてはるる也是達の注釋したまふ

諸説成考あませ且常悦愚意乃語を述べて
進をいひしつる時も記憶のため又あつて傳りぬ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the word "Bible" and other illegible characters.

成道の事

此の事... 新古今集... 賀茂... 阿比... 一夜... 事... 或... 出家... 始... 空... 仁和の法時

僧正遍昭七十此賀を... 一... 花山の... 連仁二年八月... 彼... 釋河... 免... 若... 昔の... 阿...

の古月よむあひく心をやくはむと次は
恋しき人の事一を頼むおびおと物れ
の流を唯月を物ねも後をねも
を流を後も月をかこはるに
望む利まよりと見れは月此我ま
れを後も子阿く後をわより物
涙を月をかこはるに
阿く後を我物を名をわより
月を何と見く見てさ
物れくわく我意備る人の月
たる心中いのはより物思ひの
と云く常悦云わく後をわ
りか子とるりか
ゆ
る

一首此神いとけさかく出まよ
まゆ

中流をわく舟人梳を後
新古今集意一歌一
紀別の名あり舟後
と舟後のと不用あり
と波あくく岩月ま
おこはるる舟よを梳
梳をおく先波を任
奇序奇ありとい
梳を後をわく舟
舟を後をわく舟

曾根 好忠

一向子まむしく林かせに登りしなり堂上平局
清方もつても侍候したまをあらううちよあつて
ゆるしたまをなまうして地下までハ於そ
まはしむる

皇太后宮太史

新古今集末卷上初書入道前関白大政大臣
右大臣に侍けり時百首前より後をとりむる
よき書のおしはしをとり出せ老人のむす
もあつてとを考のあまのくいとあつて
いふおと志のふを都よりとりおふハころ
をとりむる地と云く 常記考 都を善乃

いふこととむかひをみやうにて考といふ
よきお物のとあつて花の都工のこと思ひ
けふことよ世裏に弥論を侍書ふるやと
公のうへに哉なりむ重哉りて大く
にとととのひのこまを

とて山嶽を枝に雪あて花をそけり年にはあふれ西行法師
新古今春上頭不知注日あつての枝より雪を
くらあつて餘まははよきまふれはむをそ
けはふとあつて心なるへ 何とあつて
あつてあつてとあつて考記をけ哉を弘く末
哉推量しむる外あつてむまき哉也

可也ぬまはしほくまぬくやせりやて人の神をぬりほくま 三条院
新古今集恋三白虫二条院湯時あり川ま 滋養
か魚つとらんとはは恋といふふとむと有詠云
ふの心と曉みわれとわをう縁て我涙工かの
うはせし人の神をぬりせし也 常悦云
歎息はふれよとむむをさき也

山原と枝のむたちみぬまて尾上の風に花のなうを 大納言
新古今集末巻下河出見山花といふ心哉
とあり詠云 市の心と花の海むく空
ちよのさく枝るともみぬ風情海とに

おもひぬく見ゆとを判
常悦考傳若み右のうら花のちはし八姉り
とハ聊かをさしと者く成経介の作と也
遠 右子あさる色外月外ホの方へ近
ゆるしとも涼山子入るやみる木杉の村たち
もみぬぬをわり尾上の目とちりうさく
を新風情真あるさうれと感句 まき所
哉めて重哉也吉郎のうけ六首のうら
までハけふぬくははる哉もハ能中をわし

おとぎのつや又月の阿やの草あやのまぬ恋もはくし讀余知
古今集恋一歌はくははるは云はふの八序ありせ

常徳云

五月毎の辰巳の段より一月や出づ
宵より始りていそ文ありハ存を西
かきぬくはなれハ空より西の空を録やる
あろなき一 勿論空より物より月哉
中月といふもいと路くや此哉とて意味
深くおぼりてむ重き哉なり

と山田の巻とて唱麻の巻におと詠されしとあるは西の巻
新古今集録下巻より次常徳云 山田とて
人志急りて巻とて唱麻の巻とおと詠ら
る詠て唱子など引くおとろり一とて
こ詠ふと一 然れ詠く感吟はれ

人間萬事一母おと詠り今日のうへ
首之悟あゝあゝおと詠りて都ら何の
より仕なけられく詠るはうと詠るは
忘る事あれをむと詠るはうと詠る
の通事成候ありはとに意味甚深
なる事おとろりされく詠るはあれ
面白詞はうむやう是も哉と詠る
あは詠るはと詠りてむ重き外也

中宮大夫

山田の巻の風不録とて夜詠麻の巻を
新古今集録下巻より白川院より
し詠けるは山田家秋鳥といふる

人々よみ侍をさしとけり常悦云
び哥一ふ
かく世にさる所なくおぼえさる遊まで田家
志秋身いとあそれ涼くや猶あけいさ
屋戸扉下やりきさむ又花より迎きいな
葉此風より夜覚てさるあるを涼あ
麻のきを圃たふ其奥を舞かさん
是又哉りさ奥感心涼くさるりて
おもたむ哉也

阿のれといへき人もおもわして才は徳母さぬさう風操徳公
拾遺恋五 詞を物いさける女の故に津れ
あくをへさる事ありり不逢信れをさる

傳母云逢不遇恋れ亦乃心ありはさる
人とりふと世間の人とみるうよ也恋すれ
也とさは見えぬありぬあそれを思ふ心へさ
れれさるへこのさるつられを海して
世間の人み阿をれといふは身人ハ部たり
さるおろしぬとのあそれりさる唯身れさ
はさるまれと恋志ぬあつらぬく境をれさ
我をあそれとあそれも阿は海はれハ
身のいさほしめれさるむと乃義我
いとあそれ涼きさる也 常悦云 初来をれ
くおるさるへ阿は海はれ也

夜更をて祢をほしおと下夜更かふるはての月清門

後拾遺志二 聖中 中の園白女将不素

ける時をてせりうりまは人よおいひわさるりもま
たの免くこらりもあは法とめく女工かを
ましくよめるととて傳子云居とくくハ又
をぬえりり 猶縁と書常悦云程ハ歎也
疑心深き物ゆへ將人るとれりや喜と山
深くあやうくしてを程まもまも人や何
むと又子をけく事縁ははと何りくゆ
物は変定せぬるふいへり傳子回をさる免
をををれも者の百と障るると何りま
ありた子をぬ事とや何んかとをさるひて

小敷もはせおまて待りにありたすを次
未届うにつせぬくを伝やまもてとく祢
なほしとあやうくやくと化人を伝ふり
まの海とくかふふきをさる我名しりよと
うらうらみさるり汝名しのねりて上へ
かへる公ありくかくありたまはぬるま
ハ向海に伝りて夜とハかすはらむ
おまひを繁海にさ物をととさるる
おまひていと重き哉るり

八重白新婦を後らるおぬ風より是まふ人か内親お子
新古今集末巻下 聖中 家のいさよとく

ねくもく 惟明親王此もことにはりたり
を何り注云ふ此れはるる聖なるはるる
もくや風りうはなまてぬれり風より
はるるにふ人あつて見次へはれと問はは
む録も先見を申せとるり

各り世にあふ坂山は録を人母志録くころよも
後撰集巻三 初出 女のもくははるる
と何り傳云 愚意の心やはねあつてハ草あり
葉子真首少事ありお坂山は悪く
むむあふまそり本ハ何り方よりしんたは
知次もあつてもふまはれり何りより

むむ録も知次ね葉子人の廢るころ
ははねとあつたそのは録をあつてい
あつて聖したる何りま首の何りより
とあもあはぬをまへいむむくげ首
乃何りにおふ人の人よあはれをまへ
りてて録む物をとるりはれをて
い録るといふりは各よあつてははれ
後ありとてむ録をまへるも何り
のれとれ預哉也ぬ人よあつて人
あつてははれ漏二候は法てよむハ化
流あり人よあはれとみるはあつても
人よあはれもあはれよあつてははれ

念はれ情は河の流を不用の説也尚流は右
申通刃意意よく濁てよむあり何と地
ありふ人も世よあつ続てきてをばよも
かたとあき意のこころ深切也常流云尚流乃
通よと申し地も真なる北何はとらうく家とも
あれぬをよひよむかとも家ありとあり
ろくろ流るれ

河の流は世の介れ思ひ世も今世た念のなるとい 和泉 武部
流拾世に集意二 朝書 句比例を次伝り
ける比人のものよに流るはけりと有傳云
あつとあむと云詞母二説あり一説ハ秋牙

はをよ何の流あつ世と云心也え何人と云ふと流
あらんあり又一説はくあんと云心といへり
流ともあむはをよあつ流何むと云説よろし
は世の介とをよ世なりあむ流も復せす
してあむふ人も世えすりあつたつと毒執と
成く真流の流るりといふも流るるれと
某世よその思ひ世もあ今令のこの介一と流
えよと世を別せよと云世なり一二句結
結りて今世とたかると云詞深切もあ
は流るりよく心をばせく見家流る

志中此は末さへいふ世はあふとりの流の命は必三句母
後同

新古今集巻二 詞書 中関白かよひるあはれ
多面比と有侍同けりふと云詞交て
今日と云事一に河一浪唯今の心もく逢て
る時の地的乃事也今とい六後工なきゆ
今日とい一り一前の方と逢見え時よ不
末のを所れうはるはと世の習
にて志せしとい人のかも末いりや
事も何りて契りれかたりとせんとかく
はりかたせれと志せしと海をぬけたり
只今逢みりうら死うら海もんと也
早意契りれいりもてもなみ浪有た
とあふふころよりい入る美あり浪あり

妙うてあをい浪う浪涼切ふるやう
前なり

うと浪のうと浪やい世を八種も波のよき逢えて
新古今集巻一 歌志 浪云有度浪 浪河
りうらとくといとん枕詞なり下句も
浪も浪まく浪のよき
あまうらうの那

三巻の中へ
けいとう後の方
浪白てい
兼珠君、
下句
かま留ふし
ゆ外の心
外之依はて
時流ても
かすし

たふとを久しき世に
新勅撰集巻二 詞書 女をえては
あまうらうの那

君の為事此聖にいて、若草は、我衣に、吾の律法、光尊天皇
古今集上、仁和の帝、此清子、
おけい、時人、若草を、まひけふ、
と有傳、若草を、たまふ、ハ、
事なり、人日、
と有り、人日、正月七日、
草の、
賀子、
僧正、
と有り、
まて、
此の、

か、
を、
電、
出、
此、
た、
一、
の、
多、
く、
有、
ま、

ちと遅きはくちまへ〜
こしはとてふ前〜意味いと深くおれ
り

二人をまの浦の夕影に鏡やの海の方とつて 権中納言 定家

新勅撰集巻三 詞三 建保六年 内管司合
意新とをを繕より〜身や傳曰
おれハ萬葉集六 長新又ハ松帆の浦
の影なき小玉藻うらまはく、夕ををよ〜
はをよは、あ〜おとの野とあはれ我
と〜よみたぬへり一日のり〜あ〜ん
毎夕〜まら〜て連〜あ〜の切

な〜心を木か終津〜とよみたまへ
夕渾肝心なりと家祇もい〜かくも
〜とく治風静ふいとのか那れ夕くれ
〜まきと契りをき〜人の〜こむかと
お〜もまぬあり夕ををよ〜海まき
陸境〜ありも〜ある路〜おふまを
お〜我思ひの胸の燈をよを撫て
〜や〜もの〜方〜か〜
夕渾〜と待〜まら〜り〜わ
〜も〜子ハ烟とふくれを〜
〜や〜お〜傳〜心〜子〜
〜を〜ぬ人〜を〜つ〜わ〜の〜

ちと系北家よりよありて申すべし
逆次はめ思ひよまはれし心や
可なりたうあきののよしの系をいふなり
いとと認むと思ふなりこれより判とせり
常規たうにけしけし付書も有る通を記し
ひりふしと今案の思ひ北よりと申す
といふ所は深く心をつちて之れはけしとめ
のおもきと云ふ能くはけしなり
叔序れり申すは北の系北よりと説あり
一説は北系と云ふことありて是を北の系と
川の系と云ふ事にて是を北の系と
云ふ又一説は北系と云ふ事にて是を北の系と
云ふ

傳曰は是れを北の系と云ふなり又麻
は是れを北の系と云ふ事にて是を北の系と
云ふ

右傳本恭珍君秘置詔ふ所乃秘本也
寛政四年壬子六月十一日改て詔ふ一詔ふ仍
字違有也

易之

古文行本... 二月十日...

在文化五十年戊辰二月三日初夜書傳集
之師字畫者也

曾綱

此書係曾綱所書
其書法極其精妙
其筆力極其雄健
其神氣極其清逸

此書係曾綱所書
其書法極其精妙
其筆力極其雄健
其神氣極其清逸

